

山田錦の面積3倍に拡大

15年酒米 栽培方法確立目指す

日本酒「**瀨祭**」を製造する旭酒造（山口県）と2014年、酒米「山田錦」の契約栽培をした県内の2団体が、15年の栽培面積を前年比約3倍に拡大する。主食用米の需要や価格が低下する中、安定した需要が見込めるためだ。山田錦は晴天が多い西日本で多く栽培され、本県での栽培は難しいとされるが、2団体は栽培を続けることで本県での山田錦の栽培方法確立を目指す。

旭酒造（山口）と契約の県内2団体



2014年産山田錦の収穫作業。天候にも恵まれ、品質や収量は良好だった。14年10月、上越市

瀨祭は山口県が選挙区の安倍晋三首相がオバマ米大統領に贈ったことなどで知られ、国内外で人気を集めている。14年から山田錦を栽培しているのは、妙高市のコメ集荷業者「天黒屋商店」の

本県農家と山田錦の契約栽培を進める旭酒造（山口県）の桜井博志社長に、売れ行き好調の「瀨祭」や本県での山田錦栽培について聞いた。

「瀨祭ブームが続いています。

「売上高は2014年9月期が約46億円で、ことし65億円くらいになる。ただ瀨祭の供給が間に合わず、苦情が寄せられ、飲食店のメニューから消えるなど会社経営はピンチだ。『幻の酒』から脱却し、きちんと供給できる酒蔵になりたい。新潟で山田錦を栽培するのも安定供給のためだ」

「14年の本県産山田錦の品質をどのように評価しますか。」

（旭酒造の）製造部門からは

生産組合と、長岡市に事務局を置く「新潟・山田錦栽培会」。14年はそれぞれ4万5000袋を生産した。大黒屋商店は15年、栽培面積を前年の13・5倍の50万坪に増やす考え。金子洋一社長は「まだ山田錦の量が足りないようなので拡大する」と話す。14年産の価格が下落したこしいぶきの生産量を半分ほどに減らし、山田錦など酒米を栽培する方針だ。14年は収量目標の20万坪をクリア。約8割が1等米となり、「兵庫県産に

引けを取らないものもあつた」（金子社長）と手応えを感じている。「コシヒカリが売れないので山田錦を増やしていくと思う」と話すのは、山田錦栽培会事務局を務める工コ・ライス新潟（長岡市）の豊永有マネジャー。15年は14年の2・4倍となる120万坪での栽培を予定している。14年の収量は210万坪、1等米比率は50%だった。豊永マネジャーは「初年度としてはまずまず」とみる。

ただ14年は、山田錦のような晩生品種の栽培に適した天候だったため、両者とも「これで成功したとは言えない」と慎重な見方をしている。金子社長は「収穫時期がつかみづらかった。上越での栽培はまだ乗り越える課題がある」。豊永マネジャーは「たまたま天候に恵まれた。9、10月が高温だったらうまくいかなかった」と振り返る。両者は栽培方法の確立のためにも生産を続ける考えだ。

旭酒造・桜井社長インタビュー

主産地になること期待



「主産地の兵庫などではいま以上の大幅な増産が見込めない。今後数年で新潟での生産量を増やし、主産地にすることを目指したのではない」

「本県での山田錦の栽培を今後どのように進めますか。」

（品質が）非常に良いという評価を聞いている。新潟は複数の農家が集まり、一定の規模で栽培している。互いに競い合い、情報交換しながら栽培していることが品質向上につながった。的な地域だ」